

中学生期における不登校の発生予防に関する研究 ー 第1報 不登校発生に関与すると考えられるスピリチュアル要素を 把握するための質問紙の作成ー

増田 敦^{*1}・鈴木路子^{*2}

^{*1} 専門学校 三育学院カレッジ

〒298-0297 千葉県夷隅郡大多喜町久我原 1500

^{*2} 東京福祉大学 大学院 教育学研究科 (伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町 2020-1

(2015年11月27日受付、2016年9月8日受理)

抄録: 本研究では、『スピリチュアルに関連する要素が満たされていない状態』にあるとき、不定愁訴や抑うつ性、生活習慣の乱れが引き起こされ、結果不登校が発生する」という仮説を立てた。仮説を基に、WHO憲章の改正案で加えられることが提起された「スピリチュアル」に着目し、「不定愁訴」、「抑うつ性」、「生活習慣」といった心身の健康に関する要因と「働く」、「生きがい」、「愛される、愛する」といったスピリチュアルに関連すると考えられる要素との相互関係から考察し、不登校傾向の生徒の把握と不登校を防止するための方策を探ることを目的とした。本報告では、「働く」、「生きがい」、「愛される、愛する」といった不登校発生に関与すると考えられるスピリチュアル要素を把握するための質問紙を作成した。その質問紙の作成過程と内容について報告する。

(別刷請求先: 増田 敦)

キーワード: スピリチュアル、生きがい、働く、愛される、愛する

はじめに

近年、不登校の児童生徒の数が増加傾向にある。文部科学省平成26年度学校基本調査速報(文部科学省, 2014)によると、2013(平成25)年度長期欠席者のうち「不登校」を理由とする小学校児童および中学校生徒はそれぞれ24,000人と95,000人であった。どちらも前年度を3,000人および4,000人上回っており、増加傾向にあった。特に中学校では、前年度まで不登校の生徒数は減少傾向にあったが、再度増加に転じた。今後も不登校の児童生徒は増加すると予想される現状にあって、その要因について明らかにすることが必要である。近年、学校に「登校する」、「登校しない」ということに対して様々な考え方や価値観があり、一概に不登校は問題だと決めつけることはできない。しかし、学校に行きたくても行くことのできない児童生徒に対してはその問題点を明らかにし、解決策を講じることは重要な課題ではないかと考える。

これまでの研究によると、不登校の発生要因として「不定愁訴」、「生活習慣」が考えられている。中野・長谷川

(1997)は、不定愁訴とは「不安定で消長しやすい自律神経性身体的愁訴のことで、それにみあった所見の得られない病態を包含してとらえた概念である」としている。つまり原因がはっきりしない症状の総体を言う。症状としては倦怠感、疲労感、発汗、のぼせ、不眠、頭痛、めまい、肩こり、腹痛、食欲不振、便秘、下痢、嘔吐、動悸、息切れ、胸痛、不整脈など多彩である。

藤原(2001)は、「登校したくない気持ちや、登校することに対しての不安や恐怖感があることを、直接言葉で表現することはまれである。初めは頭痛、腹痛、不眠、朝の倦怠感、発熱など身体症状を認めやすい」としている。このことから学校に行くことができない直接的原因は不定愁訴であるが、その不定愁訴を発生させている要因は別にあるとも考えられる。中永(2001)は日常生活にみられる不定愁訴を健康指標にして調査を実施した結果、睡眠時間、生活リズム、生活活動指数、体力など生活習慣に関する項目の乱れが不定愁訴に関与していると述べ、「健康的な生活習慣の確立が不定愁訴および不登校の発生予防になっている」とした。また堀(2001)は、「意欲低下が疑われる子どもたちは

かなり抑うつ的になっている」とし、抑うつから不定愁訴や不登校の問題を考察している。さらに堀内(1992)は、「価値の多様化、教育観の混乱、物の豊かさ、情報過多、人間関係の複雑化など環境条件の変化が急激な現代社会においては、子ども自身の体内リズムや生活リズムと大人の要請する生活リズムとの間にズレやギャップが生じやすく、結果として子どもの心に歪みが生じ、様々な問題行動が発生することになる」と述べ、生体リズムと生活リズムの面から不登校の発生要因を考察している。これらの報告は、不登校は身体的、精神的、社会的な要因によって心身の健康が損なわれることによって発生していると指摘している。

さて、WHO(世界保健機関)はWHO憲章前文のなかで、「健康」を「完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない。」と定義してきたが、1998年のWHO執行理事会における憲章全体の見直し作業の中で、「健康」の定義を「完全な肉体的、精神的、Spiritual及び社会的福祉のDynamicな状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない。」と改めるため総会の議題とすることが議論された。最終的に投票となり、賛成22、反対0、棄権8で総会の議題とすることが採択された。この議題が採択された理由は、「健康」の確保には、「生きている意味・生きがいなどの追及が重要」であり、「Spiritualityは人間の尊厳の確保やQuality of Life(生活の質)を考えるために必要な、本質的なものである」という意見が出されたことにある。実際には、1999年のWHO総会において、「現行の憲章は適切に機能しており、早急に審議する必要性が他の案件に比べ低い」とのことで審議されることはなかった。しかし、WHO執行理事会の提言以降「Spiritual」も健康を定義する上では重要な構成要素だと考えられる傾向が高まっている。

では、「Spiritual、以下スピリチュアル」とはどのようなことを意味する言葉として用いられているのだろうか。1983年のWHOガンの緩和ケアに関する専門委員会報告では『「スピリチュアル」とは、人間として生きることに関連した経験的な一側面であり、身体感覚的な現象を超越して得られた体験を表す言葉である。多くの人々にとって、『生きていること』が持つスピリチュアルな側面には宗教的な因子が含まれているが、『スピリチュアル』は『宗教的』とは同じ意味ではない。スピリチュアルな因子は身体的、心理的、社会的因子を包含した、人間の『生』の全体像を構成する一因子とみることができ、生きている意味や目的についての関心や懸念と関わっている場合が多い」と述べている(飯田・吉田, 2009)。このことに関して医療の現場では、「スピリチュアルケア」、「スピリチュアルペイン」、「スピリチュアルニード」という考え方がある。このうち

「スピリチュアルニード」は、スピリチュアルな問いに答えをみつけないとするニード(欲求)のことである。藤井(2000)は、スピリチュアルニードには5つあるとした。①命の意味(生きている意味):「他人の世話になってしか生きることのできない自分に生きている意味があるのか」、②人生の価値:「人生に本当の価値あるものがあるのか」、③苦悩の意味への問い:「この苦しみに何の意味があるのか」、④罪責感:「もし赦されるなら、誰が“赦す”と宣言してくれるのか」、⑤死後の世界:「死んだらどうなるのか」である。

またマズローは、欲求階層説で人間の持つ欲求には低次元の欲求から高次元の欲求へと5つの階層があり、低次元の欲求が満たされてはじめて高次元の欲求へと移行することができるとした。そして5つの欲求とは、「生理的欲求(生命維持のための本能的欲求)」、「安全欲求(安全、安心な生活の欲求)」、「所属と愛情の欲求(集団への帰属、他者から受容されたいという欲求)」、「尊厳の欲求(他者から価値ある存在と認められたい、尊敬されたいという欲求)」、「自己実現の欲求(自己の持つ能力を最大限發揮して創造的な活動をしたいという欲求)」であると説明した(社会福祉士養成講座編集委員会, 2011)。このことについて藤井(2000)は、5つの欲求は第三段階「所属と愛情の欲求」までと第四段階「尊厳の欲求」以降ではその性質が変化しているとした上で、第四段階以降は「自分自身の存在意味」に関わる欲求であると述べている。

窪塚(2014)はスピリチュアルを「人生の危機に直面して生きる拠り所が揺れ動き、あるいは見失われてしまったとき、その危機状況で生きる力や、希望を見つけ出そうとして、自分の外の大きなものに新たな拠り所を求める機能のことであり、また、危機の中で失われた生きる意味や目的を自己の内面に見つけ出そうとする機能のことである」と定義している。また哲学者のニーチェ(Nietzsche, 1887)は「苦しみに対して人を憤激させるのは、実は苦しみそのものではなくむしろ苦しみの無意味さである」と述べており、人は無意味なことに耐えられないことを示唆している。

これらのことから人間には生きる意味や目的といった自分自身の存在の意義に答えを求めようとする欲求があることが推測され、それがスピリチュアルという言葉が意味することではないかと考えられる。

では、生きる意味や目的といった自分自身の存在の意義、すなわちスピリチュアルにはどのような要素があるのだろうか。

精神分析学者のフロイト(Sigmund Freud, 1856-1939)は、「精神的に健康な人間にできることは、働くことと愛することである」と述べ、「働くこと」、「愛すること」が人間の健康に影響をおよぼすことを示唆している(小田ら, 2001)。

芝 (2001) は、中学生に対する意識調査の中で「喜びについて感じる時」という質問に対し、「努力などの成果を感じる時」と回答している生徒が男女とも上位であったことを報告している。努力をするということは何らかの働き(活動)をすることであり、人間は何らかの働きを通して喜びを感じていると言うことができる。また、林 (1995) は、「生きがいを感じる時はどんなときですか」という学生に対する質問に「周りから自分が必要とされていると感じたとき。そしてその期待に応えられたとき」、「自分自身の価値を認められたとき」、「大きな、大切な仕事を任されたとき」、「人のために役立っているとき」と回答していたと報告している。「大きな、大切な仕事を任されたとき」、「人のために役立っているとき」という回答は「働く」と密接な関係があり、また、働いて「他者から価値ある存在と認められる」、「他者から必要とされる」ことは自己の「生きがい」にもつながるということが推測される。

宗像 (2002) は、健康の重要なポイントとして「受け入れられたい」、「必要とされたい」、「認められたい」および「愛されたい」という4項目をあげているが、フロイトが言うように「愛する」ことができるためには、まず「愛されている」ことが必要である。また「愛される」ためにはその存在の価値を認められることが必要であると考えられる。存在の価値が認められ「愛されている」からこそ自他を「愛することができる」となると考えられる。そして、自己が他者にとって「かけがえのない存在」、「受け入れられている存在」であることを知ることができる。

このことから「働く」こと、「愛される、愛する」こと、そしてこの2つの要素に繋がる「生きがい」はスピリチュアルという、生きる意味や目的といった自分自身の存在の意味を確認するための要素になっていると考えられる。

上述したように、これまでの研究によって、不登校の原因は「不定愁訴」、「抑うつ」、「生活習慣」といった心身の健康上の問題によって発生していることが明らかになっている。しかし、これら心身の健康問題の背後に、生きる意味や目的といった自己の存在の意義、すなわちスピリチュアルに関連する要素の欠如が潜んでいるのではないだろうか。つまりこれらの要素の欠如が心身の健康に悪影響を与え、ひいては不登校に至らせる根本的な要因になっているのではないかと考える。

そこで本研究では、『『スピリチュアルに関連する要素が満たされていない状態』にあるとき、不定愁訴や抑うつ、生活習慣の乱れをきたし、結果不登校が発生する」という仮説を立てた。そして、WHO憲章の改正案で加えられることが提起された「スピリチュアル」に着目し、「不定愁訴」、「抑うつ」、「生活習慣」といった心身の健康に関連する要因

と、「働く」、「生きがい」、「愛される、愛する」といったスピリチュアルに関連すると考えられる要素との相互関係から考察し、不登校の発生要因の把握と不登校を防止するための方策を探ることを目的とした。

本論では「働く」、「生きがい」、「愛される、愛する」といった不登校発生に関与すると考えられるスピリチュアル要素を把握するための質問紙の作成過程と、その内容について報告する。

研究対象と方法

1. 研究対象

調査対象は、調査依頼書を郵送し協力の承諾が得られた公立中学校(沖縄県1校、群馬県2校)、私立キリスト教主義全寮制中学校(広島、沖縄、茨城各1校)、国立教育系大学付属中学校(東京都1校)の7校の中学生計1,158名である。調査の有効回答数は1,078(有効率93.1%)で、これら进行分析の対象とした。

2. 質問紙

1) 質問項目

質問項目は、スピリチュアルに関連する要素として考えられる「働く」、「生きがい」、「愛される、愛する」をキーワードに、これらに関連する質問項目を40問作成した(表1参照)。

2) 質問項目の回答方法

質問項目の回答方法は3件法(「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」)で、それぞれ3点、2点、1点として得点化した。質問に対して肯定的に回答した方が高い得点が得られるように作成したが、質問の一部は逆転項目になっている。この場合、得点を逆にして換算した。

3. 調査方法および調査時期

1) 調査方法

調査協力の承諾を受けた学校を訪問し、研究の主旨を説明した。また担当教諭に質問紙を提示し、質問項目の確認をしてもらった。質問の表現等で分かりにくい、あるいは表現の仕方が不適切であるなど修正を求められた項目はすべて修正し、最終的に、表1に示す質問項目となった。

その後、必要な部数を各学校に送付もしくは持参した。調査は学校行事前後、学期末など生徒の心身の状態が不安定になりやすい時期を外したいとの学校側の要望に応じて実施した。担任もしくは学年担当の教諭が質問紙を配布して、教諭の立ち合いのもとで、各生徒が自分で質問項目を

表1. 質問項目に対する回答の平均値および標準偏差 (N=1,078)

質問内容	平均値	SD
1. あなたは、何か頼るもの(人・物・その他)がありますか	2.65	0.68
2. あなたは、誰かから生かされている存在だと思いますか	2.20	0.83
3. あなたは、“命”(いのち)ほど大切なものはないと思いますか	2.45	0.80
4. あなたは、人間を含め自然界のあらゆる命は平等だと思いますか	2.16	0.89
5. あなたは、人間以外の生命に対しても自分の命と同様に大切にしていますか	2.12	0.80
6. あなたは、生きることについてうんざりしていますか(*)	2.66	0.61
7. あなたは、誰かから支えられて生きている存在だと思いますか	2.57	0.71
8. あなたは、死ぬことに対して恐れがありますか(*)	1.57	0.80
9. あなたは、死ぬことはすべての終わりだと考えますか(*)	1.99	0.92
10. あなたは、他の人のために自分の命を捨てることができますか	1.75	0.74
11. あなたは、他の人のために働くことが苦になりませんか	2.02	0.77
12. あなたは、自分のよい所も悪い所もありのまま認めることができますか	2.35	0.78
13. あなたは、損(そん)と思うことでも率先(そっせん)して働きたいと思いますか	1.80	0.75
14. あなたは、困った人を見ると手助けしたいと思いますか	2.53	0.65
15. あなたは、働くことが好きですか	2.06	0.76
16. あなたは、誰(人間に限定しない)かから必要とされている存在だと思いますか	2.10	0.78
17. あなたは、自分が好きですか	2.08	0.80
18. あなたは、家族が好きですか	2.67	0.60
19. あなたは、信頼できる友達がいますか	2.70	0.61
20. あなたは、誰(人間に限定しない)かから受け入れられた存在だと思いますか	2.29	0.72
21. あなたは、何か人間を超えた存在(神)がいると思いますか	2.27	0.87
22. あなたは、困ったとき、どうしようもないとき頼るもの(人・その他)がありますか	2.62	0.68
23. あなたは、困ったとき、どうしようもないとき祈ることがあります	2.22	0.89
24. あなたは、「人間の生きる目的は他の人のために働くことだ」と思いますか	1.58	0.72
25. あなたは、今日という日が楽しければそれで良いと思いますか(*)	1.79	0.88
26. あなたは、一日の中で感謝することがあります	2.56	0.70
27. あなたは、生活がすごく楽しいと感じますか	2.38	0.76
28. あなたは、失敗することを恐れていますか(*)	1.78	0.84
29. あなたは、失敗してしまったとき、次は頑張ろうと思いますか	2.65	0.64
30. あなたは、失敗してしまったとき、いつまでも悩んでしまいますか(*)	2.12	0.84
31. あなたは、人を許すことができますか	2.65	0.61
32. あなたは、人はお互いに許しあうことが大切だと思いますか	2.71	0.57
33. あなたは、誰(人間に限定しない)かから愛されている存在だと思いますか	2.24	0.77
34. あなたは、この世界には人間の知恵の及ばない大きな存在があると思いますか	2.54	0.71
35. あなたは、自分は将来幸せになれると思いますか	2.32	0.70
36. あなたは、他の人が「いやだな」と思うことはできるだけしようにしたいと思いますか	2.65	0.61
37. あなたは、自分のやりたいことをするためにはある程度他人に迷惑をかけてもしかたがないと思いますか(*)	2.09	0.81
38. あなたは、将来に希望を持っていますか	2.50	0.72
39. あなたは、毎日自分らしく生きていますか	2.49	0.72
40. あなたは、他の人がして欲しいと望むことをやっていきたいと思いますか	2.44	0.68

(*) : 逆転項目

読みながら回答し、疑問等があれば教諭に尋ねるという形式で行った。質問紙には表紙を付け、そこに生徒に対する調査への協力要請と個人情報の取扱いについて明記し、可能な限り安心して回答できるように配慮した。

質問紙は各学校から記入終了の連絡を受け、筆者が学校を訪問して回収した(一部郵送してもらった)。また、調査用紙の回収の際、担当教諭に調査時の問題や生徒からの質問等の有無について確認したが、特に指摘事項はなかった。

2) 調査時期

調査は、できるだけ調査時期による誤差がないように、2002(平成14)年6月中旬～7月上旬に実施した。

4. 回答結果の集計と分析方法

1) 集計方法

回収した質問紙は、それぞれの質問項目で選んだ回答(「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」)を得点化(3点、2点、1点)し、表計算ソフト「Excel」を用いて回答者別に得点換算し、表にまとめた。

2) 分析方法

集計表を用いて、各質問項目の平均値、標準偏差を算出し、天井効果およびフロア効果の有無を確認した。

次に、SPSS Ver.23を用いて最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。内的整合性の検討には、Cronbachの α 係数を求めた。

因子数は、固有値1.0以上を基準とし、スクリープロットで視覚的に固有値の推移がなだらかになる前までを選び決定した。質問項目の削除は因子負荷量0.35以下を基準とした。因子負荷量の基準は明確なものではなく、負荷量0.35以上や0.40以上など論文によって異なっていた。本研究では幅広い質問項目から解釈したいと考え負荷量0.35以上を採用することにした。因子分析によって質問項目を選択し因子構成を確認した。

結果

1. 因子分析前の手続き

まず40問の質問項目のうち、因子分析の対象から除外する質問項目を選ぶために平均値、標準偏差を算出した(表1)。

除外する基準として3件法で回答してもらったため、各項目2.5以上(天井効果)、1.0以下(フロア効果)とした。除外対象になった質問項目のうち2.5以上の質問項目についてはヒストグラムで確認し、大きな偏りが認められる項目を除外した。1.0以下はすべて除外した。

その結果、作成した40項目の質問に対し天井効果およびフロア効果が見られたQ1、Q6、Q7、Q18、Q19、Q26、Q29、Q31、Q32、Q36の10項目が削除され、残りの30項目に対して、再度最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。

2. 質問項目の因子構造

1) 因子数の決定

初回の因子分析の結果では、固有値1.0以上の因子は8項目であったが、スクリープロットで視覚的に固有値の推移を確認し、5因子構造が妥当であると考えた。そこで、5因子と仮定し最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。計3回の因子分析を行ない、最終的に各因子に3～5項目、計18項目を決定した(表2)。

2) 因子の命名

因子名を以下のように決定した。

第1因子は「Q39.あなたは、毎日自分らしく生きていますか」、「Q27.あなたは、生活がすごく楽しいと感じますか」、「Q38.あなたは、将来に希望を持っていますか」、「Q17.あなたは、自分が好きですか」、「Q35.あなたは、自分は将来幸せになれると思いますか」の5項目で構成された。これらの項目に共通していることは「自己の生活の充実度」や「自己の希望的将来像」を問う内容であり、また生活が充実しているということは「生きがいがある」と考えた。そこで「自己充実感(生きがい)」因子と命名した。

第2因子は「Q16.あなたは、誰(人間に限定しない)かから必要とされている存在だと思いますか」、「Q33.あなたは、誰(人間に限定しない)かから愛されている存在だと思いますか」、「Q20.あなたは、誰(人間に限定しない)かから受け入れられた存在だと思いますか」の3項目で構成された。これらの項目に共通していることは、何らかの形で他者から「大切にされている」という肯定的な感覚を問う内容と考えた。そこで「被受容感」と命名した。この被受容感とは「自分は他者から大切にされている」という認識を指す言葉として用いた。

第3因子は「Q13.あなたは、損と思うことでも率先して働くことができますか」、「Q14.あなたは、困った人を見ると手助けしたくなりますか」、「Q15.あなたは、働くことが好きですか」、「Q40.あなたは、他の人がして欲しいと望むことをやっていきたいと思いますか」の4項目で構成された。これらの項目に共通していることは、誰かのために「働く」、「奉仕」という積極的な姿勢を問う内容であると考えた。そこで「働く(奉仕)」と命名した。

表2. スピリチュアル要素の因子分析結果

質問番号／因子	因子負荷量					共通性
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	
Q39	.783	-.104	-.050	-.039	-.001	.486
Q27	.598	-.009	.087	-.019	-.022	.404
Q38	.571	-.032	-.080	.099	-.016	.386
Q17	.475	.295	-.121	.034	.036	.426
Q35	.463	.245	-.039	.055	-.050	.422
Q16	-.058	.858	.012	-.055	-.021	.653
Q33	.003	.728	-.001	.064	.027	.571
Q20	.088	.705	.053	-.065	.006	.590
Q13	-.041	-.041	.610	-.012	.140	.346
Q14	-.032	.026	.589	.093	-.095	.410
Q15	.050	.019	.514	-.054	.075	.288
Q40	.029	.067	.486	.040	-.147	.334
Q21	.103	-.074	-.010	.718	.027	.493
Q23	-.079	.069	-.011	.577	-.011	.351
Q34	.045	-.064	.055	.435	-.023	.200
Q8	-.101	-.019	-.023	.013	.593	.372
Q9	-.034	.084	.029	.307	.362	.227
Q28	.226	-.008	.113	-.212	.356	.235
因子相関行列	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	
第1因子	1.000	.643	.483	.167	-.050	
第2因子		1.000	.506	.406	-.063	
第3因子			1.000	.426	.014	
第4因子				1.000	-.128	
第5因子					1.000	

第4因子は「Q21. あなたは何か人間を超えた存在（神）がいると思いますか」、「Q23. あなたは、困ったとき、どうしようもないとき祈ることがありますか」、「Q34. あなたは、この世界には人間の知恵の及ばない大きな存在があると思いますか」の3項目で構成されている。この項目は「人知を超えた存在の認知」を問う内容である。そこで「人知を超えた存在の認知」と命名した。

第5因子は「Q8. あなたは、死ぬことに対して恐れがありますか」、「Q9. あなたは、死ぬことはすべての終わりだと考えますか」、「Q28. あなたは、失敗することを恐れていますか」の3項目から構成されている。これらは「死」に

ついてどのように考えているかを問う内容であると考えた。そこで「死・失敗に対する考え方」と命名し因子とした。

3) 信頼性の検討

因子の信頼性についてChronbachの α 係数を算出し内的整合性の検討を行った。第1因子「自己充実感（生きがい）」0.766、第2因子「被受容感」0.814、第3因子「働く（奉仕）」0.643、第4因子「人知を超えた存在の認知」0.592、第5因子で「死・失敗に対する考え方」0.343という結果であった。また、5因子全体の α 係数は0.787であった（表3）。

表3. スピリチュアル要素の信頼性の検討結果 (α 係数による)

因子	質 問 項 目 (*=逆転項目)	α 係数
自己充実 (生きがい) 感	39. あなたは、毎日自分らしく生きていますか	.716
	27. あなたは、生活がすごく楽しいと感じますか	.726
	38. あなたは、将来に希望を持っていますか	.726
	17. あなたは、自分が好きですか	.728
	35. あなたは、自分は将来幸せになれると思いますか	.719
被受容感	16. あなたは、誰 (人間に限定しない) かから必要とされている存在だと思えますか	.723
	33. あなたは、誰 (人間に限定しない) かから愛されている存在だと思えますか	.761
	20. あなたは、誰 (人間に限定しない) かから受け入れられた存在だと思えますか	.749
働く (奉仕)	13. あなたは、損と思うことでも率先して働くことができますか	.574
	14. あなたは、困った人を見ると手助けしたくなりますか	.550
	15. あなたは、働くことが好きですか	.586
	40. あなたは、他の人がして欲しいと望むことをやっていきたいと思えますか	.588
人知を超えた 存在の認知	21. あなたは、何か人間を超えた存在 (神) がいると思えますか	.357
	23. あなたは、困ったとき、どうしようもないとき祈ることがありますか	.489
	34. あなたは、この世界には人間の知恵の及ばない大きな存在があると思えますか	.590
死に対する 考え方	8. あなたは、死ぬことに対して恐れがありますか (*)	.109
	9. あなたは、死ぬことはすべての終わりだと考えますか (*)	.320
	28. あなたは、失敗することを恐れていますか (*)	.339

(*) : 逆転項目

考察

1. スピリチュアル要素と各因子に構成された質問との関連性

1) 「自己充実感 (生きがい)」因子に構成された質問

この因子に構成された質問内容は「自分らしく生きている」、「生活がすごく楽しい」、「将来に希望を持っている」、「自分が好き」、「自分は将来幸せになれる」で、いずれも自己や将来に対する積極性が問われる内容であった。これらの質問は人間の生きる意味や目的といった自分自身の存在意義と関係があると考えられる。つまり生きる意味や目的について何らかの解答を持っているか、いないかが肯定的あるいは否定的な回答につながるのではないかと考えた。このことから「自己充実感 (生きがい)」はスピリチュアルに関連する要素を把握するための因子として適しているのではないかと考えた。

2) 「被受容感」因子に構成された質問

この因子に構成された質問内容は「必要とされている存在である」、「愛されている存在である」、「受け入れられた存在である」といずれもその個人の存在性を問う内容であった。

宗像 (2002) は、健康の重要なポイントとして「自らを生きる価値ある存在と認めたい」、「人に価値ある存在と認められたい」、「愛されたい、助けられたい」、「必要とされたい、役に立ちたい」をあげているが、これらはスピリチュアルニード (欲求) である。このことから「被受容感」はスピリチュアルに関連する要素を把握するための因子として適しているのではないかと考えた。

3) 「働く (奉仕)」因子に構成された質問

この因子に構成された質問内容は「損と思っても働く」、「困った人を手助けする」、「働くことが好き」、「他の人が望

むことをやる」であった。いずれも働くということに関する問いであった。

因子相関行列から「自己充実感(生きがい)」因子、「被受容感」因子、「働く(奉仕)」因子には相関関係があることがわかった。これは「働く」ことが自己の存在意味や生きがいを見つけ出すとともに、他者から受入れられ認められることにもつながっていくのではないかと考えられる。このことから「働く(奉仕)」はスピリチュアルに関連する要素を把握するための因子として適しているのではないかと考えた。

4)「人知を超えた存在の認知」因子に構成された質問

この因子に構成された質問内容は「人間を超えた存在(神)がいる」、「あなたは、困ったとき、どうしようもないとき祈る」、「あなたは、この世界には人間の知恵の及ばない大きな存在がある」の3項目で構成されている。質問の意図としては、苦しい時、困った時に「頼るものがあるか」ということを問うことを目的とし質問を考えた。神や人知を超えた存在という言葉を使っているが定義づけは行っておらず、各自の判断に任せて回答をしてもらった。生徒によって捉え方が異なることが予想されるため質問として適さないのではないかと判断されるが、「誰か」あるいは「何か」という頼ることのできる存在の有無は「愛される、愛する」関連し、スピリチュアルに関連する要素を把握するための因子として用いてもよいのではないかと考えた。

5)「死・失敗に対する感じ方」因子に構成された質問

この因子に構成された質問内容は「あなたは、死ぬことへの恐れ」、「死ぬことの意味」、「失敗への恐れ」の3項目から構成されている。これらは死や失敗についてどのように考えているかを問うもので、信頼性が低く質問として用いることができないのではないかと考えた。信頼性が低かった原因として、当初「生きる」と「死ぬ」ことの関連性から質問を考え、そして回答も関連づけて得られるものと予想したことがあげられる。しかし、中学生に生と死を関連づけて回答してもらうためには、調査方法を工夫する必要があった。つまり、質問で問うている内容について十分な説明を加えた上で行わなければならないということである。今後の課題としたい。

2. 因子の信頼性の検討

因子の信頼性の検討はChronbachの α 係数を算出し、内的整合性の確認を行った。 α 係数による信頼性の評価には明確な基準があるわけではないが、0.700以上であれば「内的整合性が高い」と判断される。逆に0.500以下では、

その因子を使うことを再検討することが望ましいと考えられている。そこで本研究でもこの基準を基に考察をおこなった。

結果から、第1因子「自己充実(生きがい感)」と第2因子「被受容感」は、それぞれ0.766、0.814であり、いずれも0.700を超えており内的整合性が高いと考えられた。第3因子「働く(奉仕)」、第4因子「人知を超えた存在の認知」は、それぞれ0.643、0.592であり内的整合性が十分に得られているとは言えないが、0.500以上であることから因子として用いることが可能ではないかと考えられた。第5因子「死に対する考え方」は0.343であり、下限である0.500を下回っているため因子として使用することについて再検討が必要であると考えられた。

結論

本研究は、『「スピリチュアルに関連する要素が満たされていない状態」にあるとき、不定愁訴や抑うつ性、生活習慣の乱れをきたし、結果不登校が発生する」という仮説を立て、WHO憲章の改正案で加えられることが提起された「スピリチュアル」に着目し、「不定愁訴」、「抑うつ性」、「生活習慣」といった心身の健康に関する要因と「働く」、「生きがい」、「愛される、愛する」といったスピリチュアルに関連すると考えられる要素との相互関係から考察し、不登校の発生要因の把握とそれを防止するための方策を探ることを目的とした。

本報告では、「働く」、「生きがい」、「愛される、愛する」といった不登校発生に関与すると考えられるスピリチュアル要素を把握するための質問紙の作成過程とその内容について報告した。結論として以下の3点を述べ、まとめとする。

1. 因子分析の結果、不登校発生に関与すると考えられるスピリチュアル要素を把握する質問として、「自己充実(生きがい感)」、「被受容感」、「働く(奉仕)」、「人知を超えた存在の認知」、「死に対する考え方」の5因子18項目が得られた。

2. 因子の信頼性の検討では、「自己充実(生きがい感)」、「被受容感」は内的整合性が高いと考えられた。しかし「働く(奉仕)」、「人知を超えた存在の認知」は十分な内的整合性を得ることができなかった。また「死に対する考え方」は因子として用いるかどうかの検討が必要である。

3. 全因子の α 係数は0.787であった。このことから、内的整合性は得られたと判断され、不登校発生に関与するスピリチュアル要素を把握する質問紙として有効であると考えた。

文献

- 藤井美和 (2000)：病む人のクオリティーオブライフとスピリチュアリティー. 関西学院大学社会学部紀要 **85**, 33-40.
- 藤井理恵 (2000)：医療現場におけるスピリチュアル・ケアーたましいの叫びを前にして－. 桃山学院大学キリスト教論叢 **36**, 95-110.
- 藤原修一郎 (2001)：特集 不登校ー子どものライフストレスと不登校, 3. 不定愁訴と不登校. ストレス臨床 **18**, 14-17.
- 林 信二郎 (1995)：子どもが家庭に生きがいを感じる時. 児童心理 **1995**年1月号, 107-111.
- 堀 篤実 (2001)：中学生の意欲低下とCDIスコア, 心身症状および家族関係との関連. 学校保健研究 **43**, 285-298.
- 堀内 聡 (1992)：登校拒否児にみられる生活リズム. 児童心理 **1992**年10月号, 24-29.
- 飯田史彦・吉田武男 (2009)：スピリチュアリティ教育のすすめ. PHP研究所, 東京, pp48-49.
- 厚生省 (1999)：WHOにおける「健康」の定義の改正案について. http://www1.mhlw.go.jp/houdou/1103/h0319-1_6.html
- 窪塚俊之 (2014)：愛に基づくスピリチュアルケア 意味と関係の再構築を支える. 聖学院大学出版会, 上尾, p159.
- 文部科学省 (2014)：平成26年度学校基本統計調査速報. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/houdou/_icsFiles/afieldfile/2014/08/07/1350732_01.pdf
- 宗像恒次 (2002)：心の疲れが身体や行動に表れるメカニズム. 児童心理 **2002**年4月号, 10-17.
- 中永征太郎 (2001)：生活習慣と不定愁訴. 運動・健康教育研究 **10**, 53-68.
- 中野弘一・長谷川久見子 (1997)：不定愁訴の歴史的変遷. 医学のあゆみ **181**, 1009-1012.
- Nietzsche, F.W. (1887)：Zur Genealogie der Moral (木場 深定訳 (1964)：道徳の系譜), 岩波文庫, 東京, p77.
- 小田 晋・中嶋 宏・荻生田千津子ら (2001)：健康と霊性ーWHO (世界保健機関) の問題提起に依てー. 宗教心理出版, 東京, pp70-71.
- 社会福祉士養成講座編集委員会 (2011)：新・社会福祉士養成講座<2> 心理学理論と心理学的支援ー心理学 第2版, 中央法規出版, 東京, pp36-37.
- 芝 誠貴 (2001)：現代の中学生の意識調査結果ー中学生の感情についてー. 運動・健康教育研究 **10**, 69-79.

A Study on the Prevention of School Maladjustment among Middle School Students.
First report: Development of a Questionnaire about Understanding of Spiritual Elements
Which Are Regarded as Occurrence of School Maladaptation

Atsushi MASUDA^{*1} and Michiko SUZUKI^{*2}

^{*1} Saniku Gakuin College,
1500 Kugahara, Ootaki-cho, Isumi-gun, Chiba 298-0251, Japan

^{*2} School of Education, Tokyo University and Graduate School of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : This study focused on “spiritual”, as defined and indicated in the revised Health Charter, by formulating a hypothesis that when the elements related to “spiritual” is unfulfilled, it brings about “indefinite complaint,” “depressiveness” and “breakdown in basic lifestyle habits”. This article explored the correlation between the elements related to mental and physical health such as “indefinite complaint”, “depressiveness” and “basic lifestyle habits”, and the elements related to “spiritual” such as “work”, “meaning and the purpose of life”, and “love and beloved”, and also aims at understanding school maladaptation-prone students and ways of prevention. In this report, the questionnaire about understanding the spiritual elements such as “work”, “meaning and the purpose of life” and “love and beloved” which are regarded as occurrence of school maladaptation was developed. As a first report, both the process of developing the screening test and it's contents are described.

(Reprint request should be sent to Atushi Masuda)

Key words : Spiritual, Meaning of Life, Work, Love and beloved